

## 第1章

# 認知言語学のどこが「認知的」なのだろうか？

西村義樹・長谷川明香

### 1. 本章の目的

理論言語学の世界では、1950年代半ばにチョムスキー（Noam Chomsky）の創始した生成文法（generative grammar）が現在に至るまで主流を形成してきた。その生成文法と対立するいくつかの枠組みがゆるやかに合流した一種の理論的共同体として1980年代半ばに出現し、現在では生成文法と並ぶ一大潮流に発展しているのが認知言語学である<sup>1</sup>。こうした成立の経緯を考えれば容易に想像がつくように、認知言語学の特徴の多くはこの理論と（少なくとも1980年代半ば頃までの）生成文法との主要な対立点に見出すことができる。

認知言語学の特徴は、その名称からして、ヒトの認知（心の仕組み）の一端として言語を捉える——言語の使用を可能にする（大部分が意識化されることのほとんどない）知識の解明を目標とする——ところにあると思われるかもしれないが、実はこの特徴だけでは認知言語学を生成文法と区別することはできない。それどころか、この目標はこの2つの理論に共通の特徴なのである。生成文法はいわゆる「認知革命（cognitive revolution）」の原動力となった理論の1つであったと一般に考えられているが、それはこの理論が言語知識（言語能力とも呼ばれる）とは何かを明らかにすることを当初から目指してきたからに他ならない。その生成文法と対立する理論として登場したのが認知言語学なのであるから、後者の名称に含まれる「認知」という表現には、単に言語知識の解明という目標以上の意味が込められているはずで

1 本章には西村・長谷川（2017）および西村（2018）と重複する箇所がある。

ある。以下ではその意味とは何かを明らかにしていきたい。

## 2. 言語知識の位置づけ

「認知言語学」という名称の由来は、ヒトの心の仕組み全般との関連で言語の知識をどのように位置づけるかをめぐって、この理論が生成文法と決定的に異なる立場を表明しているところに求めることができる。生成文法が「言語知識は（実際の言語使用に関与する）他の知識や能力から自律したモジュール（module）ないし心的器官（mental organ）を構成する」という言語観を旗印とするのに対して、認知言語学を特徴づけるのが「言語知識は他の知識や能力と密接不可分の関係にあり、前者の本質は後者との関連を考慮して初めて十分に解明されうる」という言語観であることがわかれば、「認知言語学」がそのように呼ばれる理論に相応しい名称であることは理解しやすいであろう。生成文法を特徴づける言語観が「モジュール的（modular）」であるのに対して、認知言語学の基盤にあるのは「統合的（integrated）」あるいは「全体論的（holistic）」な言語観であると言える。

### 2.1 言語とコミュニケーション

ヒトをヒトたらしめている特徴の1つが言語使用であることに異論の余地はないが、その言語使用を可能にする知識とはいかなるものか、言語知識の獲得にはどのような心的メカニズムが関わっているのか、言語知識は種としてのヒトがヒトになる過程でどのようにして発生したのか、などの重要な問いをめぐっては、専門家間でいまだに意見が大きく分かれている。

そうした争点のすべてと密接に関連するのが「言語とコミュニケーションの関係性をどのように捉えるのが適切か」という問いである。言語とは、常論的には、まず何よりもヒトのコミュニケーションの（おそらく最重要の）手段として機能するものであるから、言語知識の本質もその機能と分かちがたく結びついていると考えるのが当然であると思われるかもしれない。実際、認知言語学でもそのように考えられている（この理論が言語学における機能主義（functionalism）の伝統に属するとされるのはそのためである）。しかしながら、専門家の中には（チョムスキーを代表として）、言語がコミュニケーションの手段として機能しているという事実は（起源・進化を含めて）言語

知識の本質とは直接関係ないという立場を取る人も少なくない（そのため、生成文法は言語学における形式主義（formalism）の理論の1つとされる）。そのように考える理由としてよく挙げられるのは「言語はコミュニケーションの手段としてはあまりに不完全である」という観察である。確かに、われわれが日常的に使う文などの言語表現には字義通りに（すなわちコンテキスト抜きで）は（発話者の意図に反して）、2通り以上に解釈できたり、意味が不明確だったりするものが多々ある。言語学においては、いわばその不完全さがどのようにして補われてコミュニケーションが成立するのかを研究する領域として、（意味論が対象とすると想定された字義通りの意味から発話者の意図したメッセージを推測することを可能にする仕組みを扱う）語用論（⇨第4章）があるのだが、語用論はその原理が（生成文法が研究対象として想定する）狭義の言語知識とは異なる、ヒトの（言語使用という目的に特化されない）一般認知能力に属すると考えられていることもあって、言語学でも言語の起源・進化の研究でも、従属的な地位しか与えられない傾向がある。

認知言語学の言語観と調和する言語起源・進化の理論を展開している Scott-Phillips (2015) は、その傾向に真っ向から反して、語用論（中でも関連性理論（relevance theory））が説明の対象とする意図明示＝推論コミュニケーション（ostensive-inferential communication）<sup>2</sup> という、ヒトに特有のコミュニケーションを行う能力こそが言語の起源・進化の謎を解く鍵であると主張している。すなわち、ヒトという種はヒトという種になる過程で独自の（他者の心を読む能力を基盤とする）コミュニケーションの能力をまず獲得し、その後、そうしたコミュニケーション能力の使用をさらに効率的にすべく成立したのが言語知識である、という主張である。これはまさに逆転の発想であって、これが正しければ、言語の本質は（ヒトという種に固有の）コミュニケーションの手段として機能するところにはないと考えるチョムスキーらがその根拠として挙げる「言語はコミュニケーションの手段としてはあまりに不完全である」という観察はほぼ確実に間違っていたことになる。

2 あるメッセージを受信者に伝達する意図が自らにあることを発信者が受信者に明示し、受信者が推論を通してそのメッセージを再構成することによって成立するコミュニケーションのこと。

コミュニケーションの手段としての言語の不完全さを補うために語用論的な原理があるのではなく、逆に、そのような原理に反映されたヒトに特有のコミュニケーション能力をさらに強力にすることにこそ言語の本質があると考えられるからである。言語は話し手が聞き手に伝えたいメッセージを伝える手段として不完全であるという主張は、言語が意図明示＝推論コミュニケーションの能力を共有する話し手と聞き手が使用するように設計された道具であることを度外視したものであり、「箸は独力で（ヒトの力を借りずに）食べ物をつかんで口に運ぶことができないという意味で食事を使う道具としては不完全であるから、箸の本質はヒトが食事の際に用いる道具であることにはありえない」と言うのと同様に理不尽であることになる（Tomasello 2008 も参照）。

議論を具体的にするために、Scott-Phillips (2015: 128) も例として挙げている英語の人称代名詞について考えてみよう。例えば典型的な用法における *he* が実質的な意味内容としてもつのは三人称（話し手と聞き手以外）、男性、単数のみであるから、この人称代名詞が指示しうる対象は潜在的には無数に存在する。それでは、その事実から、そのような語を単位として含む言語は（無限の曖昧性を生じさせる潜在性をもつがゆえに）コミュニケーションの手段として不完全である、という結論を引き出すことは妥当であろうか。言語が意図明示＝推論コミュニケーションの道具として設計されているとするならば、このような結論が成立しえないことは明らかであろう。決定的に重要なのは、典型的な用法における人称代名詞には「定 (definite)」という意味特徴が含まれていることである。すなわち、*he* を用いる話し手は、指示対象が三人称、男性、単数という条件を満たすことさえ指定すれば、聞き手には自分と同じ唯一の指示対象を特定できるはずであるという情報を聞き手に伝えていることになる<sup>3</sup>。そもそも定性という概念自体が意図明示＝推論コミュニケーションを前提として初めて成立しうることに注目されたい<sup>4</sup>。

3 I can't use my computer—the keyboard is malfunctioning において the keyboard を用いる話し手が、指示対象を「キーボード」というタイプの単一のインスタンスであることさえ指定すれば、聞き手には自分と同じ唯一の指示対象を特定できるはずであるという情報を聞き手に伝えているのと平行している（例文は、Langacker 2008: 287 より）。

4 認知文法における概念基層 (conceptual substrate) に関する議論（例えば Langacker

## 2.2 言語表現の担う意味

認知言語学では、一般に言語表現の意味（慣習化したものを含む）の成立には、狭義の「言語的」（「辞書的」、「意味論的」、「コンテキスト中立的」）な要因のみではなく、通常「言語外的」とされる（「百科事典的」、「語用論的」、「コンテキスト依存的」な）要因も決定的に関与しており、いわゆる「言語的」な意味の多くは、実際には、「言語外的」な知識との関連を度外視しては十分に規定することができない——前者を後者から分離することは不可能である——と考えられている（Haiman 1980, Langacker 1987: 4.2, Taylor 2003: ch.5 参照）<sup>5</sup>。これは、言うまでもなく、言語の知識全般がヒトのもつ他の知識や能力と不可分の関係にあり、前者の本質は後者との関連を考慮して初めて解明されうするという（生成文法を特徴づける「モジュール」的な言語観と対立する）認知言語学の「統合的」、「全体論的」な言語観の一環である。

この考え方を、複数の有意味な要素（語彙項目など）から構成される複合的な表現（典型的な文など）の意味の合成性（compositionality）という問題との関連で検討してみよう。文の意味がその文に生じる複数の語彙項目がもと——構文環境やコンテキストから独立して——有すると考えられる意味をその文の文法構造に従って組み合わせることによって、過不足なく得られるとき、その文の意味は完全に合成的であると言う。少し単純化して言えば、文が伝達するメッセージのうちで意味論が対象とする（言語知識に属する）のはそうした完全に合成的な意味であり、それ以外の部分は語用論の領域である（言語知識の問題ではない）とするのが生成文法的な考え方である。それに対して、認知言語学的な考え方に基づく、文の意味の合成性は一般に部分的にしか成り立たず、そもそも完全に合成的な意味が自律した意味としての一貫性をもつと言えるかどうかとも疑わしい。われわれが文の意味であると素朴に考えるものは言語外的な要因が決定的に関与して初めて成立する

---

2008: 13.2) を参照。

5 ここで言う「コンテキスト」とは、発話の産出と理解に際して話し手と聞き手が参照する、両者がほぼ共有すると想定される「言語外的」（すなわち、当該の言語表現に内在すると想定される意味以外の）知識のことであり、また、認知文法において「百科事典」的とされる知識には発話の場についての話し手と聞き手がほぼ共有すると想定された知識が含まれることに注意。

のが普通だからである<sup>6</sup>。具体的には以下のような要因である。

- a. ダイクシス (deixis)：指示詞、人称代名詞、時制標識などの意味はそれらを含む文が使われるコンテキストを参照しないと確定できない。
- b. 多義性 (polysemy)：日常的に多用される語彙項目のほとんどは多義であるが、現実の言語使用において特定の文に生じる際には、そのうちのいずれか1つの意味を表すと解釈されるのが普通である。この場合にも、どの意味を表すかを決定するには構文環境やコンテキストを参照することが不可欠である。
- c. 百科事典的な知識：語彙項目の意味が1つに確定してもなお、その意味は(語彙項目に内在する一定不変のものではなく)その語彙項目の指示対象に関する一般的な——言語使用という場面に特化されない——知識のうち、構文環境やコンテキストとの関連で、活性化される部分であると考えられる。
- d. 文全体の意味との相互作用：現実の言語使用において文が伝達する意味がその文を構成する有意義な要素(語彙項目や構文)によって動機づけられ、制約を受ける一方で、コンテキストからの情報をも取り込みながら前者が柔軟に構築される過程で後者がその文で担う意味が定まるという面もある。

### 3. 文法とは何か

言語の知識の内部がどのように構成されているかをめぐっても、認知言語学、とりわけラネカー (Ronald W. Langacker) の認知文法 (cognitive grammar) の考え方は生成文法のそれとは著しく対照的である。特定言語の知識は語彙項目の目録である「語彙」と語彙項目の組み合わせのパターンを規定する(狭義の)「文法」という相補的な部門から構成されると一般に考えられている。このうち語彙に属する知識の単位である語彙項目が特定の音声(または文字や手指動作)の連鎖と特定の意味との組み合わせ(一種の記

6 認知文法では複合的な表現の意味に関して草創期からそのような考え方が採用されている。Langacker (1987: 155–157, 12.1.2.; 1988: 13–18) 参照。

号)であることには異論の余地はまずないものと思われる。それに対して、文法的な知識の構成単位(例えば、名詞、動詞などの文法カテゴリー、主語、目的語などの文法関係、受動構文、there 構文などの構文)がそれぞれ特定の意味を担っているか——意味に基盤をもつカテゴリーであるか——否かは、容易には答えの出せない問いであるばかりか、言語理論にとって根本的な問題の1つであると言ってよい。文法と意味との関係のあり方に関するこの問いをめぐるても、認知言語学(中でも認知文法)は生成文法と鋭く対立しているのである。

「(統語論)自律性テーゼ (autonomy thesis)」として知られる生成文法の基本的主張または仮説によれば、文法的な知識は、意味との間に規則的な対応関係はあるものの、それ自体としては意味に基づいて特徴づけることの不可能な要素や原理によって構成されている。それに対して認知文法の根底にある文法観 (symbolic view of grammar と呼ばれる) は、文法的な知識を構成する単位 (複数の語彙項目の結合パターンおよびその成分) は、語彙項目と同様、いずれも一定の形式と一定の意味との組み合わせ (一種の記号) である——文法的な知識は、語彙的な知識と相補って、記号体系を構成する——というものである (第2章)。

### 3.1 対立の背景

生成文法が *Syntactic Structures* (Chomsky 1957) という書物として世に出た段階では、この理論の主な対象は (その書物のタイトルからも明らかなように) 統語論であった。チョムスキーは、統語論が意味 (論) と重要な接点をもつことはもちろん認めていたものの、統語論的なカテゴリーや原理自体は純粋に形式的な (意味的なカテゴリーや原理から独立した) 存在である——統語論の基盤を意味に求めることは不可能である——と考えていた。このことと密接に関連して重要なのは、草創期の生成文法では、意味の問題は言語構造をどのように使用するかという問題の一環であるという立場が取られていたことである。この段階の言語構造とその使用は後の *Aspects of the Theory of Syntax* (Chomsky 1965) の言語能力 (さらに後の用語では言語知識) と言語運用にそれぞれほぼ対応すると考えてよいから、最初期の生成文法では、言語表現がどのような意味を表すかは、言語の知識そのものではなく、

その知識をどのように使用するかに関わる問題の一種であると考えられていたとすることができる。

その後 *Aspects of the Theory of Syntax* で提示されたいわゆる標準理論では、文の表す意味（の少なくともいくつかの面）も言語の知識に属すると考えられるようになったが、この段階でもまだ、新たに理論に加えられた意味部門には（音韻部門とともに）統語部門に対して従属的な地位しか与えられておらず、統語論が意味から自律した知識の領域であるという初期理論以来のテーゼが揺らぐことはなかった。このことは（ある種の）意味を射程内に収める枠組みとしての標準理論の成立に大きく貢献した Katz and Fodor (1963) に見られる “linguistic description minus grammar is semantics（言語の記述から文法を差し引いて残るのが意味論である）” という有名なスローガンや “semantics takes over the explanation of the speaker’s ability to produce and understand new sentences at the point where grammar leaves off（新しい文を生み出し、理解する話し手の能力の説明において、意味論の仕事は文法の仕事が終わったところから始まる）” という発言にも反映されている。チョムスキーの生成文法が提示する言語知識のモデルが、現在に至るまで一貫して、意味（論）から自律した統語論中心であり続けているのは、このような理論展開の仕方と無関係ではないと思われる。また、心的器官としての言語知識という生成文法に特徴的な言語観は統語論自律性テーゼと表裏一体である——前者は後者から導き出されたものである——と考えることができる。統語論が純粹に形式的な（意味に基盤をもたない）知識の領域であるとしたら、それを中核とする言語知識自体も、他の知識や能力と相互作用はするものの、基本的にはそれらから自律した構成原理によって成立していると考えざるを得ないであろう。

生成文法のこのような理論展開に対して、認知言語学では最初期から一貫して「意味（の表現・伝達）こそが言語の本質である」という考え方がその根幹にあったと言える。例えば、生成文法学者であったレイコフ (George Lakoff) とラネカーが認知言語学の創始者になりえたのは、当時の生成文法という枠組みの中では言語によって表現・伝達される意味の解明という自らにとって最重要の課題に正面から取り組むことはできないと判断してこの枠組みから離脱し、そのような取り組みを可能にする新しい理論の構築を目指



した結果なのである<sup>7</sup>。

### 3.2 文法とカテゴリー化

通常の言語使用（例えば日常的なコミュニケーション）では、複数の語彙項目を特定の仕方で結びつけて複合的な表現（典型的には文）を新規に産出し、そうした表現を理解することが必要である。ここでは、文法と意味がどのような関係にあると見るのが適切かという問題に対してこの事実のもつ意味合いを考察してみたい。

認知言語学ではカテゴリー化（categorization）の重要性がしばしば強調される。「分類する」または「種類に分ける」ことを意味するカテゴリー化が日常生活に遍在し、きわめて重要であることには気づきにくいかもしれないけれども、実際には、われわれは起きている間中（もしかすると眠っている間も）ほとんど無意識のうちに絶え間なくカテゴリー化を行っており、そうしたカテゴリー化の多くはヒトの生存にとって不可欠な行為なのである。

カテゴリー化は、ヒトに限らず、すべての生物によって不断に行われている。自己と同種の個体を同定したり、敵と味方を区別したり、食べられるものか食べられないものかを識別したりするのもカテゴリー化の例である。道を歩いていて、こちらに近づいてくる動物を見て「犬だ」と判断するような場合も、意識的ではなくても、その動物を犬としてカテゴリー化しているわけである。

このように、カテゴリー化は普段あまり意識されてはいないけれども、実は日常生活の中で絶え間なく行われており、それなくしては生存することが不可能になると言っても全く誇張ではないほど、ヒトにとって、あるいは生物一般にとって、きわめて重要な営みであると言える。認知言語学の最大の特徴の1つは、（ヒトに特有のものも含む）そうしたカテゴリー化の仕方が言語の構造にさまざまな形で色濃く反映されていると考えるところにある。

カテゴリー化という用語に含まれるカテゴリー（category）とは分類項目または種類（上の例の場合には動物の種類としての犬）のことである。少し考えてみればわかるように、ほとんどすべての語はカテゴリー（種類）の名

7 理論言語学史における認知言語学の位置づけについては酒井（2017）を参照されたい。

前であると言ってよい。例えば大多数の(固有名詞を除く)名詞や動詞は、(生物を含む)ものや行為などのカテゴリーの名前であると考えて差し支えないであろう。そうであるとする、ある語を適切に使えるということにはその語と慣習的に結びついているカテゴリーを正しく使えることが必然的に含まれると言えることになる。例えば、「犬」という語の意味を知っていると考えるためには、「犬」が表しているカテゴリーを適切に使う(例えば犬を見た時にそれを犬として了解する)ことができなければならないわけである。

文法と意味の関係を考える際に重要なのは、同じようなことが文の意味についても言えるということである。例えば「さっき犬が猫を追いかけていたよ」という文の発話者は、それを構成している各語彙項目(「犬」、「猫」、「追いかける」、「(て)いる」など)の表すカテゴリーと、この文の文法構造(どんな構文で、主語は何かなど)と結びついたカテゴリー(〈行為〉や〈移動〉などの事態のタイプ、〈行為主体〉や〈移動主体〉などの事態の構成要素の役割のタイプ)などによって、自らの経験した事態をいわば多面的にカテゴリー化しているのである。さらに、自分の経験した事態にそのように多面的なカテゴリー化を適用することによって、ヒトはその事態を有意味なものとして了解する——意味づける——ことができ、そのようなカテゴリー化を表す文を発話することによって、他者に自己の経験(の1つの了解の仕方)を的確に理解してもらう(自己の経験を他者と分かち合う)ことができるのだ、と考えてよいと思われる。逆に、そういうカテゴリー化ができなくなれば、事態を了解したり、自分の経験を他者に伝達したりすることそのものが——少なくとも現在われわれが普通にしているような了解や伝達は——ほとんど不可能になってしまうであろう。

言語学者はほとんど注意を払わない傾向があるが、ヒトのコミュニケーションにおいてやりとりされるメッセージの大多数は(語彙項目が複数組み合わせられているという意味で)複合的な表現(以下では簡略化して文と呼ぶことがある)を使って初めて伝え合うことができるという事実はきわめて重要であると思われる。単一の語彙項目のみで言いたいことが十全に伝わることは実は非常に例外的であり、普通は(多くの場合新しく)文を組み立てないと伝えたいメッセージを表現することはできない。すぐ上で例としてあげた「さっき犬が猫を追いかけていたよ」という文を考えてみよう。この文を

用いれば難なく伝えられるメッセージを単一の語彙項目のみを用いて伝達することは不可能に近いであろう。さきほど用いた多面的なカテゴリー化という言い方をするならば、ヒトはそうした多面的なカテゴリー化をしなければ大多数の事態を有意義な仕方では了解することができないし、そのように了解した事態を的確に他者に（言語を用いて）伝達するためには文を組み立てるしかないと言ってよいと思われる。

この点についてさらに掘り下げて考えてみよう<sup>8</sup>。表現・伝達したい内容（日常の経験など）の大多数を言語化する際に新たに文を組み立てなければならぬ理由の1つは、そのような内容全体（の特定の了解の仕方）を単独で表すことのできる——そうした内容全体に相当する意味をもった——単一の語彙項目が存在しないことである。実際に存在する個々の語彙項目は単独では言い表したい内容の断片にしか対応していないため、話し手は表現したい内容を複数の語彙項目の意味に（さまざまな程度に）対応する複数の断片に分解した上で、それらの語彙項目を特定の仕方では組み合わせることによって（複数の語彙項目の意味が特定の仕方では統合された）複合的な意味構造を構築し、その意味構造を利用して内容を（多くの場合いわば近似的に）復元して表現するほかないのである。その際、それぞれの語彙項目の（慣習化された）意味が言い表したい内容のそれに対応する断片をカテゴリー化し、それらの意味を特定の仕方では統合することによって生じた複合的な意味構造が内容全体をカテゴリー化していると言ってよいであろう。

それでは、これまで一度も経験したことのない事態に遭遇した（これ自体は日常茶飯事である）話し手がその内容全体を表現する単一の語彙項目を新規に考案することはできないのだろうか。ここで1つの思考実験を行ってみよう。話し手がその経験内容を言い表すために新たな語彙項目「ラウ」を作ったとしよう。（語彙項目はそれが属する言語の使用者の多くに共有されている必要があるので、厳密には、「ラウ」は、新規に考案された段階では、語彙項目になる潜在性をもつものにすぎない。）「ラウ」は全体で（複数のそれぞれ意味をもつ要素には分解できない単一の形態素に相当するものとして）言い表したい事態全体に対応するという想定である。すぐわかるように、

8 この段落の議論は Langacker (1987: 8.1.1, 12.2)、野矢 (2002: 第2章)などを参考にして構成した。

話し手が「ラウ」という発話のみによって（その事態を経験していない）聞き手に伝えられるのは、せいぜい自分が何か新しいことを見聞きしたということくらいであろう。それ以上の内容を伝達したいと思うのであれば、聞き手と共有している複数の（人、物、出来事などの）カテゴリーに対応する断片に事態を分解し、それらのカテゴリーを特定の仕方で統合した複合的なカテゴリーの具体例として事態全体を提示するしかなく、そのためには、複数の語彙項目を特定のパターンに従って組み合わせた文を用いざるをえないのである。

そのような文を組み立てることを可能にしている仕組み——複数の語彙項目を組み合わせて新規の複合的な表現を産出するための（慣習化された）規則またはパターンの集合——こそが（狭義の）文法であることを考えただけでも、文法と意味の密接な関係が理解できるであろう。コミュニケーションに代表される通常の言語使用において表現・伝達される意味内容の大多数は多面的なカテゴリー化を通して形成されるものであり、文法は、語彙といわば協同して、そうした多面的なカテゴリー化という意味づけの仕方を可能にする仕組みであると考えることができる。文法の担うそうした役割を考えれば、文法を構成する単位（構文、文法カテゴリー、文法関係などの文法項目）自体にそれぞれ意味があるとする認知文法に特徴的な文法観はきわめて自然なものであると言ってよいように思われる。

### 3.3 捉え方の重要性

言語の意味に関する認知言語学に特有の理論は「認知意味論」（⇒第3章）と呼ばれているが、「記号体系の一環としての文法」という認知文法に特徴的な考え方は認知意味論の諸相と密接不可分の関係にある。そうした諸相の中でも特に重要なのは、「（「語彙」的であれ「文法」的であれ）言語形式の担う意味にはその言語形式が適用される事物に対する特定のカテゴリー化の仕方——この種の議論では捉え方（construal）と呼ばれることが多い——が慣習的に組み込まれている」という見方である<sup>9</sup>。この見方によると、同じ事物を描写する複数の語彙項目または文法項目と慣習的に結びついた捉え方が

9 ここでの「捉え方」は3.2節での「了解の仕方」に対応する。

互いに異なるならば、それらの項目の担う意味は対立していることになる。これは生成文法による（「統語論自律性テーゼ」と整合する）多くの分析で（しばしば暗黙の）前提になっていた意味観と対立する見方である。この点を、(2) のような受動文を (1) のような対応する能動文との関連でどう分析するかという古典的な問題に即して具体的に考察してみよう。

(1) Bill painted the door.

(2) The door was painted by Bill.

生成文法では、受動構文の示す文法上の諸特性を初期理論以来一貫して（「変形」をはじめとする）純粹に形式的な（つまり意味から独立した）規則や原理を用いて説明しようとしてきた。その際に（暗黙の）前提になっているのは、対応する能動文と受動文は（少なくとも (1) と (2) のペアのように客観的に同じ事態を描写している——真理条件 (truth conditions) が同じである——場合には）同義である、という見方であると思われる。(1) と (2) のような対応する能動文と受動文の意味が等しいという前提に立つならば、両者の間の規則的な関係は意味から独立した原理によって規制されていると考えざるをえないし、対応する能動文と共通でない受動文の文法的な特徴（異なる主語の選択、be 動詞、過去分詞形態素、by など）はいずれも特定の意味を担っていないという考え方が自然に出てくることになる。このように、「統語論自律性テーゼ」と整合する分析の根底には客観主義的ないし真理条件的な意味観があると言える。

それに対して、言語形式の担う意味の成立にはその形式と慣習的に結びついた、事物に対する特定の捉え方（事態のどの面や段階に焦点を合わせるか、誰または何を中心とした事態として解釈するか、どのような視点から事態を眺めるか、などの要因）が決定的に関与していると考えた認知文法では、(1) と (2) のような対応する能動文と受動文は、客観的には同一の事態に対して互いに異なる捉え方を適用しているがゆえに意味上対立しており、上で触れた受動文の文法的な特徴はいずれもこの構文に特有の（能動構文とは異なる）意味（＝捉え方）の何らかの側面を担っている、と考えられている。文法形式の違いは意味の違いを反映しており、主語やいわゆる文法形態素 (grammatical morpheme) にそれぞれ何らかの意味がある点で、

これが「記号体系の一環としての文法」という見方と調和する分析であることは言うまでもあるまい。この分析が例示するように、文法研究における認知言語学(とりわけ認知文法)の特徴は、言語表現に現れる文法項目(構文、文法形態素、文法関係など)はすべて、その言語表現によって描写される事態に対する特定の捉え方またはその構成要素と慣習的に結びついている——ある文法項目を用いてある事態を表現することはその事態(の一部)に特定の捉え方を適用することに他ならない——と考えるところにある。

(1)と(2)のようなペアに対する認知文法的な分析をもう少し具体的に示しておこう。(1)が事態をビルの(ドアに対する)〈行為〉として——“What did Bill do (to the door)?”という観点から「する」的に——捉えているのに対して、(2)は客観的には同じ事態に対して(ビルの〈行為〉の結果)ドアの被った〈変化〉に焦点を絞った——“What happened to the door (as a result)?”という観点からの「なる」的な——捉え方を適用していると考えられる。したがって、池上(1981: 221-225)が指摘するように、(1)と(2)の意味上の対立は(3)と(4)のような場合と類似していることになる。

(3) Bill opened the door.

(4) The door opened.

((3)と同じ事態を報告するのに用いられているという想定での)(4)がドアの〈変化〉に焦点を絞った——その原因となった〈行為〉および〈行為主体〉を背景化した——「なる」的な捉え方を表していることは明らかであろう。受動文の形式面での特異性(be動詞や過去分詞形態素の出現など)および能動文にはない受動文の機能(〈行為主体〉への言及を避ける、〈行為対象〉への関心の強さを示す、など)は、〈行為主体〉を中核として(すなわち〈行為〉として)捉えられやすい(さらに、この場合にはそもそも〈行為主体〉の関与なくしては生じえないと考えられる)事態をあえて〈行為対象〉を中核とする〈変化〉として把握するという、この構文の意味上の有標性と密接に結びついていると考えることができる。

能動-受動の関係に対する以上のような分析が妥当であるとすれば、対応する能動文と受動文の主語が異なることには意味上の動機づけがある——主語は特定の意味を担う文法項目である——と考えることが可能になる。(1)

と(2)の主語が異なるのは、この2つの文が同じ事態に適用する捉え方が異なるからに他ならない。具体的には、(1)の表す〈行為〉という捉え方ではその主体である〈行為主体〉が、(2)の表す〈変化〉という捉え方ではその主体である〈行為対象〉が、それぞれ中核的な参与者であると言えるので、両者の主語は〈事態の捉え方における中核要素〉という(抽象的な)意味役割を共通して担っていることになるのである。

さらに、以上のような認知文法的な分析で決定的な役割を果たす捉え方という要因が(狭い意味での)言語の知識という領域に特化されないヒトの一般認知能力に根差していることも重要である。事態の参与者に着目すると、Langacker (1982) が主張するように、(1)から(2)への(目的語として表現される「準主役 (secondary figure)」から主語として表現される「主役 (primary figure)」へ、主語として表現される「主役」から by 句として表現される「脇役」へ、という)捉え方の転換は「図地反転 (figure-ground reversal)」の一種であるが、言語の知識以外の領域(例えば知覚)でも図地反転が生ずることに異論の余地はないであろう。能動文に対する受動文の有標性も(〈行為主体〉の〈行為対象〉への働きかけという事態があれば、特別な事情がない限り、前者の方がより注目されやすい、といった)一種の知覚の原理を反映したものと見ることができる。

#### 4. 使用基盤モデル：語彙と文法の連続性

言語知識の成立の仕方についても、認知文法の見方は生成文法とは根本的に異なる。言語知識の獲得に特化した生得的な機構として普遍文法 (universal grammar; UG) を想定し、言語知識とその使用を峻別する生成文法に対して、認知文法が採用するのは、現実の言語使用とそれにかかわる(言語使用という目的に特化されない)一般的な能力によって言語知識が構築されるとする使用基盤モデル (usage-based model; 用法基盤モデル、使用依拠モデルとも) である(第2章、第9章)。このモデルによると、言語知識の単位はすべて現実の言語使用に起源をもつ。そうした単位が成立するに際しては、複数の経験から共通項(スキーマと呼ばれる)を抽出する能力、カテゴリー化、複数の構造を統合して複合的な構造を組み立てる能力、連想能力などの一般的な心の働きが作用し、使用頻度が重要な役割を担う。言語

知識はこうして定着した（一般性、複雑度、アクセスされやすさなどにおいてさまざまな）単位が互いにカテゴリー化の関係を結ぶことによって構成される膨大なネットワークとして表象される。

使用基盤モデルの際立った特徴の1つは、（生成文法における抽象的な原理や規則に対応する）適用範囲の広い一般的な単位（例えば主語一般のスキーマ）とその具体例（例えば特定構文の主語のスキーマ）がネットワークの節点として共存し、多くの場合、後者のほうが前者より（実際に言語表現を産出または理解する際にアクセスされやすいという意味で）重要とされることである。例えば英語の *misgivings* のような複数形でよく用いられる名詞は、その複数形名詞自体が知識の単位となって可算名詞一般の複数形という抽象度の高いスキーマと（前者に後者が内在するという関係を結んで）共存し、現実の言語使用ではその複数形名詞がしばしば直接（可算名詞一般の複数形スキーマを介することなく）アクセスされると考えられる。

使用基盤モデルは語彙と文法の連続性という認知言語学に特徴的なもう1つの考え方と表裏一体と言ってよいほど密接に関係している。使用基盤モデルの観点から個別言語の知識の単位として（現実の言語使用において、出現頻度が高く、アクセスされる可能性が高いという意味で）とりわけ重要であると考えられるもののきわめて多くが明らかに語彙と文法のいずれにも同時に属するからである。

例えば、英語の母語話者にとって、使用頻度のきわめて高い[主語 + *make/let* + 目的語 + 原形不定詞句]というパターン——当然のことながら、形式と意味の両面をもつ知識の単位——が、分析的使役構文という文法項目についての知識の一環であると同時に、語彙項目 *make* と *let* に関する知識にも属していると考えるのは自然であろう。分析的使役構文を適切に使えるためには、その主動詞の位置に *make* と *let* が生じうることを知っている必要があり、逆に、*make* と *let* の知識を正しく身につけていると言えるためには、これらの動詞が分析的使役構文の主動詞として機能しうることを知っていなければならないからである。また、上記のパターンの適用例の中には、無生物（あるいは補文の表す事態の生起を意図していない人間）と人間がそれぞれ主語と目的語の指示対象であり、不定詞句の主要部に *feel*、*think*、*want*、*wonder* などが生じる *make* 使役文（例：That doesn't make



me feel very happy.、What makes you think so?、You make me want to be a better man.) や、人間を指示対象とする主語と bother、fool、(人を嫌な気持ちにさせるという意味の) get (to someone)、happenなどを主要部とする不定詞句をもつ let 使役文(例: Don't let it bother you.、Don't let him get to you.、I will never let it happen again.) などのように、語彙と文法の領域に同時に属する単位として定着していると考えられる下位スキーマ<sup>10</sup>が多数ある。さらに、こうした下位スキーマの方が上位の[主語+make/let+目的語+原形不定詞句]というスキーマよりもおそらくアクセスされやすい——知識の単位としての定着度が高い——ことも重要である。

最後に、Langacker (2000, 2005, 2009)、Taylor (2012) などに見られる使用基盤モデルのラディカルな解釈に触れておきたい。そのような解釈がいかなるものでどういう意味でラディカルなのかを理解するために、1990年代半ば以降認知言語学内部でしばしば論争的になり、いまだに決着のついていない問題——構文の意味と動詞の意味との関係をどう捉えるのが適切か——を取り上げてみよう。争点になっているのは、ある動詞がある構文に規則的に生じる場合、その動詞はその構文の意味と適合する意味をもつと見るべきか否かである。

例えば、以下の2つの文は、

(5) I sent a letter to Sally.

(6) I sent Sally a letter.

いずれも手紙のサリーへの〈移動〉と(その結果としての)サリーによる手紙の〈所有〉を意味に含むけれども、(5)と(6)はそれぞれ〈移動〉と〈所有〉の段階を焦点化している点で意味的に対立していると考えられている。ところで、sendはこの2つの構文(使役移動構文と二重目的語構文)のいずれに

10 これらの下位スキーマに基づく自然で日常的な英語表現に直訳的に対応する日本語表現の多くはきわめて不自然である。これは使用基盤モデルおよび語彙と文法の連続性という考え方が「英語らしさ」、「日本語らしさ」とは何か——個別言語の「好まれる言い回し(fashions of speaking)」——の研究に貢献する可能性を示唆する(第8章)。認知文法を構想し始めた頃に発表された Langacker (1976) がこのような現象には理論的に重要な意味合いがあると論じていることも興味深い。詳しくは、西村・長谷川 (2016) を参照されたい。

もきわめて頻繁に生じるので、これらの構文に現れることはこの動詞の確立された用法であると言ってよい。問題は send が使役移動構文と二重目的語構文の意味をそれぞれ具体化した互いに異なる意味をもつと考えるべきか否かである。使用基盤モデルを採用するならば、send がそれぞれの構文に適合する2つの（関連するけれども焦点の異なる）意味をもつ多義的な動詞であると考えべきであるようにも思われるが、実際には、使用基盤モデルを標榜しながら、(5) と (6) の意味の違いを2つの構文の意味的な対立にのみ帰して、この2つの文に生じる send の意味は共通であるとする立場もある。後者の立場は、動詞にはそれが慣習的に生じる構文の数だけ意味があると考えるのは不経済なので避けるべきであるという想定と、構文に言語知識の単位としての独自の地位を与えたいという願望によって動機づけられたものであろう。構文自体が意味をもつという主張と、動詞が慣習的にもつと想定される意味の数をできるだけ削減すべきであるという考え方が連動していると言ってもよい。

この問題に関して、ラネカーは使用基盤モデルを極限まで推し進めたという意味でラディカルな立場を一貫して取っている (Langacker 2000, 2005, 2009 参照)。上の例に即して言えば、特定の構文の動詞スロットに特定の動詞が入った [NP send NP to NP] および [NP send NP NP] (いずれも形式と意味の組み合わせの簡略表記) というスキーマの方が、知識の単位としては、より一般性の高い [NP V NP to NP] および [NP V NP NP] というスキーマやいずれの構文からも独立した——両者に生じる用法に共通した意味をもつ、いわば抽象的な——動詞よりも基本的であり、後者は前者から抽出される派生的で二次的な存在であると考えるのである。子供が英語を母語として身につける過程や成人の英語母語話者による言語使用に照らし合わせても、これは自然な立場であるように思われる。より基本的であるとされる [NP send NP to NP] および [NP send NP NP] が (もちろんそれぞれの担う意味も含めて) 語彙的な知識と文法的な知識の双方に同時に、より正確には、両者が渾然一体となった領域に属する単位であることにも注目された。そのような単位が多数存在し、(仮にそのようなものがあるとして) 純粋に語彙的な単位や純粋に文法的な単位よりも定着度が高く、アクセスされやすい傾向があるとするならば、語彙と文法を截然と区別される知識の領域

であると見ることは困難になるはずである。

多義の問題との関連で言えば、以上のような使用基盤モデルのラディカルな解釈によると、(5)と(6)の2つの用法に話を限っても send は多義であるばかりか、使役移動構文および二重目的語構文に生じる用法における send の、互いに焦点を異にする意味の方が、2つの用法から抽出された共通の意味よりも基本的である。さらに、その2つの基本的な意味を担うのは、少なくとも第一義的には、send という語彙項目単体ではなく、[NP send NP to NP] および [NP send NP NP] という、語彙と文法が融合した領域に属するスキーマ全体であると考えられる。語彙項目としての send の多義性とは、[NP send NP to NP] および [NP send NP NP] という語彙・文法融合的な単位に含まれる意味の間に成立する関係が、この2つの単位に共通する具体的な音形にのみ直接結びつけられることによって、あたかも純粋に語彙的な特性であるかのように見誤られたものにすぎないのかもしれない<sup>11</sup>。

## 参考文献

- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店。
- 酒井智宏(2017)「第Ⅲ部 認知言語学」畠山雄二(編)『理論言語学史』開拓社、115-165。
- 西村義樹(2018)「認知言語学の文法研究」西村義樹(編)『認知文法論Ⅰ』大修館書店、3-23。
- 西村義樹・長谷川明香(2016)「語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点」藤田耕司・西村義樹(編)『日英対照 文法と語彙への統合的アプローチ—生成文法・認知言

11 「語の意味とは、その言語におけるその語の使用のことである」という Ludwig Wittgenstein の『哲学探究』での発言は、「語の意味を知っているとは、その言語においてその語を適切に使えることの一面である」と解してよいとするならば、使用基盤モデルのラディカルな解釈に基づく語の意味の捉え方と合致する。また、ここでの多義をめぐる議論の観点から Gottlob Frege の「文脈原理」と「合成原理」の関係を捉え直すことが可能であると思われる(野矢 2010: 191-192 参照)。さらに、本節の議論との関連で、60年以上も前の George Miller の以下の発言は示唆に富む。

Why do people tolerate ... ambiguity? The answer is that they do not. There is nothing ambiguous about 'take' as it is used in everyday speech. The ambiguity appears only when we, quite arbitrarily, call isolated words the units of meaning. (人々はなぜ曖昧性を甘んじて受け入れているのであろうか。その答えはというと、実は受け入れているなどいないのである。日常の会話で用いられる場合、'take' にはどこにも曖昧なところなどない。曖昧性があるように見えてくるのは、孤立した語を、何の根拠もなく、意味の単位と呼ぶ場合のみなのである。) (Miller 1951: 112)

- 語学と日本語学』開拓社, 282-307.
- 西村義樹・長谷川明香 (2017) 「解題—「メンタル・コーパス」が示唆するもの III. 認知言語学におけるメンタル・コーパス革命」ジョン・R・テイラー (著) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか』くろしお出版, 494-501.
- 野矢茂樹 (2002) 『ワイトゲンシュタイン『論理哲学論考』を読む』哲学書房.
- 野矢茂樹 (2010) 『哲学・航海日誌 II』中央公論新社 (中公文庫).
- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*. Mouton. [福井直樹・辻子美保子 (訳) (2014) 『統辞構造論 付「言語理論の論理構造」序論』岩波書店.]
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*. The MIT Press. [安井稔 (訳) (1997) 『文法理論の諸相』研究社出版, 第1章のみ, 福井直樹・辻子美保子 (訳) (2014) 『統辞理論の諸相—方法論序説』岩波書店.]
- Haiman, John (1980) Dictionaries and encyclopedias. *Lingua*, 50, 329-357.
- Katz, Jerrold. J. and Fodor, Jerry A. (1963) The structure of a semantic theory. *Language*, 39, 170-210.
- Langacker, Ronald W. (1976) Semantic representations and the linguistic relativity hypothesis. *Foundations of Language*, 14, 307-357.
- Langacker, Ronald W. (1982) Space grammar, analysability, and the English passive. *Language*, 58, 22-80.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol.1, *Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1988) An overview of cognitive grammar. In Brygida Rudzka-Ostyn (ed.) *Topics in Cognitive Linguistics*. John Benjamins, 3-48.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-Based Models of Language*. CSLI Publications, 1-63. [坪井栄治郎 (訳) (2000) 「動的使用依拠モデル」『認知言語学の発展』ひつじ書房.]
- Langacker, Ronald W. (2005) Construction grammars: Cognitive, radical, and less so. In Francisco José Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.), *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. Mouton de Gruyter, 101-159.
- Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. (2009) Constructions and constructional meaning. In Vyvyan Evans and Stéphanie Pourcel (eds.), *New Directions in Cognitive Linguistics*. John Benjamins, 225-267.
- Miller, George A. (1951) *Language and Communication*. McGraw-Hill.
- Scott-Phillips, Thom (2015) *Speaking Our Minds: Why Human Communication is Different, and How Language Evolved to Make it Special*. Palgrave.
- Taylor, John. R. (2003) *Linguistic Categorization*, 3<sup>rd</sup> edn. Oxford University Press. [辻幸夫ほか (訳) (2008) 『認知言語学のための14章 (第三版)』紀伊國屋書店.]
- Taylor, John. R. (2012) *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*. Oxford University Press. [西村義樹ほか (編訳) (2017) 『メンタル・コーパス—母語話者の頭の中には何があるのか』くろしお出版.]
- Tomasello, Michael (2008) *Origins of Human Communication*. The MIT Press. [松井智子・岩田彰志 (訳) (2013) 『コミュニケーションの起源を探る』勁草書房.]